「危機耐性」が示唆する水道事業のこれから

～特集　今年の自然災害とこれからのリスク管理～

自然災害が頻発・多様化傾向にある中、今年も九州地方や東北地方などで水害により関係施設が甚大な被害を受け、「強靭」のために上下水道事業が留意すべき教訓が改めて浮き彫りになったことは関係者の課題認識として共有されている。さらには、今年に入ってから新型コロナウイルス問題への対応から新たな視点・発想によるリスク管理のあり方が問われていることは改めて強調するまでもない。本紙では、この課題認識を踏まえて今年の出来事とその教訓を踏まえたリスク管理の総括特集を企画。そのメイン企画として、金沢大学の宮島教授がリスク管理における新たなキーワードとして掲げた「危機耐性」をテーマとする技術座談会を宮島教授を座長に実施するとともに、水害をはじめとする今年の自然災害の教訓を改めて整理し、さらにはコロナ禍における事業継続のための上下水道事業の取り組み内容などを紹介することを念頭に紙面を構成した。

座談会「危機耐性」を軸に考えるこれからの水道事業の強靭化策

金沢大学大学院教授
宮島 昌克氏（＝座長）

「危機耐性」という概念について

宮島教授　本日は拙しいところ、私が主宰する地震防災研究会に多く加いただき、有難うございます。そして、研究会石間宏昌氏による「水道耐性」における管路更生に関する研究報告、マッピングシステムなどの最新情報、森工業の概要や管路更生技術の概略・変遷について、芦森工業技術者が情報提供しました。

座談会を開催するにあたって、「災害を立って」は、宮島研究室の内に建生管を「整備」する為、伏線から出られる石間宏昌氏による「水道耐性」における管路更生に関する研究報告、にお応えする「特長を持つルテム工法について説明。

元々は1988年に東京ガスの共同開発によりレジンモールとして開発された。

石間氏は、「所謂る高インニング工法が進められ、「同社が開発技術を保有する消防水の技術を管路更生に用いて反転工法を開発して、「同工法は、既設管の強度があるうえに整備する必要がある防保全的な意味合いの強い工法」と述べた。一方、マルテム工法なるの新たな技術は、近は進度を保持する老朽管が少なくなっていることを踏まえ、「これらの強い面を踏まえ、「これらの強い面を踏まえ、「これらの強い面を